

氏名	やまもと たけし 山本 武史
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第220号
学位授与の日付	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目	An Extended Particle Analysis of Two English Vowel Systems (粒子音韻論の拡張による英語の母音体系の分析)
論文調査委員	(主査) 教授 吉田和彦 教授 庄垣内正弘 教授 田窪行則

論文内容の要旨

本論文の目的は、Schane (1984a, b; 1990; 1995) による粒子音韻論 (Particle Phonology) の枠組みを発展させ、一般米語 (General American, 以下 GA) と英国容認発音 (Received Pronunciation, 以下 RP) の母音体系を分析することである。以下、順を追って本論文の内容をみていく。

第1章は序論である。英語は明らかに最もよく研究されてきた言語のひとつであり、英語の研究は音韻理論の発展に大いに貢献してきた。ところが英語音韻論自体のなかに、まだ解決されていない問題が残っている。母音体系がそのひとつである。

英語の母音の表記は研究者によってさまざまである。その理由はいくつかあるが、もっとも重要なものは、sheep の母音と ship の母音のようなペアの捉え方に違いがあることである。この2つの母音の間には、質・量・緊張度などの違いがあるとされるが、そのうちのどれを本質的な違いとみるかによって、分析が変わってくるのである。

うえのような母音のペアが本質的にどの点で対立しているのかという問題には、方言差もかかわっている、とする見方もあり、その場合、GA の体系においては質の対立が、RP の体系においては量の対立が、それぞれ根本的なものであるとされる。また、英語の母音がこのようなペアを成す、という考え自体を認めない研究者もいる。本論文では、このような様相を呈する英語の母音が、まさしく体系的に組織化されていることを示し、その体系の違いがうえで述べたような方言差を生みだしていると主張する。

第2章では、英語の強勢音節に現れる母音を先行研究がどう扱ってきたかを概観する。2.1節では音声学的研究と2項的素性による分析についてみたうえで、それらの問題点を指摘する。音声学的研究の例としては竹林 (1996) と Wells (1982)、2項的素性による分析の例としては Halle and Mohanan (1985)、Jensen (1993)、Giegerich (1992) を取り上げ、これらには、(1)音声的正確さが軽視されている、(2)異なる方言を同時に扱っている、(3)うえで紹介した母音のペアの問題が扱いきれていない、(4)見過ごされている母音がある、(5)体系上の隙間が説明されていない、といった問題がみられることを指摘する。

上記の(1)の問題点の原因のひとつは(2)と関連するが、それと同時に現在の音韻論で標準的に使用されている [低舌性 (low)], [後舌性 (back)] といった2項的素性の使用も大きな原因になっている。通常、2項的素性は体系内で個々の母音を弁別するために用いられ、弁別的でない音声的差異は余剰規則で処理されるのであるが、母音の表示自体にこのような余剰性も含める方が望ましいと考えられる。

次に(3)の問題点であるが、音韻論ではうえで触れた sheep の母音と ship の母音のようなペアを [緊張性 (tense)] という2項的素性で区別することが多い。ところがこの素性はその実体性をめぐってしばしば批判の対象になっており、少なくとも英語に関しては用いるべきではないと考えられる。

(4)に関しては、music の強勢音節の母音や、GA の r の音色を伴った (rhoticized) 母音が独立した母音であると認められ

ていない場合があるが、音素配列上の証拠などから、独立した母音であると認めるべきであると考えられる。

最後に(5)の体系上の隙間の問題である。この節でみた先行研究のどれにも母音体系上の隙間がある。この隙間が分析の不適切さに起因するものかどうかを検討する必要があるのはもちろんのこと、一般的に隙間は体系の変化を引き起こしやすく、これと現在英語の母音体系上に実際に起こっている変化を結びつけることも検討する必要があると思われる。

続いて2.2節では「エレメント (element)」を用いた分析を検討する。ここでいうエレメントとは1項的素性のことで、通常、A (開口性)、I (口蓋性)、U (円唇性) の3つが母音を構成するものとして標準的に認められており、それぞれが単独で、または組み合わせあって、母音を形成するとされる。

このエレメントを用いた母音表示は、融合などのプロセスを2項的素性よりも適切に表せることが知られている。また、A エレメント自体には前舌性も後舌性も含まれないとする想定が、一般的に低母音がひとつしかない母音体系の場合、その母音は中舌付近の音価を持つ非円唇母音であるという観察事実に合致し、このことからこの立場が適切であることが裏づけられる。

英語のような母音の多い言語の場合、上記の3つのエレメントの組み合わせだけではすべての母音が表せないで、それを補う提案がこれまでいくつかなされている。そのような提案のなかには、分節素内におけるエレメント間の依存関係 (dependency) を認めたり、中央性を表すさらなるエレメントを導入したりするものがある。その例として Lass (1984) と Harris (1994) の研究を検討する。これらのアプローチは2項的素性を用いたものよりも魅力的ではあるものの、分節素内におけるエレメント間の依存関係という概念が抽象的でありすぎ、また、4つめのエレメントを導入しなければならないという点で満足のいく分析法ではない、と結論づけられる。

依存関係を用いないアプローチに、Schane の粒子音韻論がある。この理論で用いられる「粒子 (particle)」は広い意味で先述したエレメントの一種であるが、開口性を表す A 粒子をひとつの表現の中に複数用いて母音の開口度を表す点にその特徴がある。また、この理論では中央性を表すにもこの A 粒子が用いられる。しかし、そのことによって、本来区別されるべき母音が区別できない、というような不都合が生じる。さらに、母音の開口度を A 粒子の個数で表すことは、前舌、中舌、後舌の各系列にそれぞれ同数の母音音素が存在する体系を予測するが、通常、中舌母音の数は前舌、後舌の母音よりも少ない。これらのことから、Schane の粒子音韻論には何らかの修正が必要であると考えられる。

第3章では、上述の不都合を補うために粒子音韻論の理論的拡張を行い、それによって GA と RP の母音体系を分析する。

3.1節では、GA の母音体系を分析する。分析に先立って、この方言の母音の音声実現を確認するが、それによって母音の分布において前上方 (硬口蓋方向)・後上方 (軟口蓋方向)・下方の3方向の対称性が存在することが明らかになる。先に述べたように Schane の理論では A 粒子だけが重ねて使用され、それによって母音の開口度が表示されたが、この対称性を根拠にして、I 粒子と U 粒子も重ねて使用できるように理論を修正する。また、各粒子とも、用いることのできる数の上限は2であり、これと音節核のスロットの数が2であることとの関連性が指摘される。この修正により、エレメントを用いた先行研究で問題となっていた、分節素内におけるエレメント間の依存関係の抽象性、第4のエレメントの導入、本来区別されるべき母音が区別できない、といった点が解決される。

この拡張された粒子による表示で GA にみられる各母音を表すと、r の音色を伴わない (nonrhotacized) 2モーラの母音が、すべて5種類の1モーラの基本的な母音の連続 (cluster) として表せるのではないかという予測が立つ。そこで、考えられる各母音連続を実際の GA の母音に対応させていく。またその際、その母音連続が直接表す音価と実際に表層に現れる音価とのずれを説明するために、第2モーラに A 粒子が現れるのを禁止する制約、粒子の削除を禁止する制約、ひとつのスロットが3つの粒子を含むことを禁止する制約を提案し、その優先度の違いによって表層でみられる揺れをも説明する。

上記のように基本的な母音の連続と実際の母音との対応を考えていくと、予測される組み合わせの数が、実際の母音の数を上回ることが分かる。そこで、母音連続にはソノリティーに関する制約がかかっていると解釈し、その階層に関して具体的な提案をする。また、いくつかの体系上の隙間に関しては、現在この方言に進行中の母音の音価の変化に関連づけて説明がなされる。うえのように分析してもなお、表層に対応物が見当たらない母音連続が4つ残るが、この問題は3.3節で再

び取り上げられる。

3.2節では、RPの母音体系を分析する。分析に先立って行う音声実現の確認により、この方言においてはGAのように粒子ひとつからなる1モーラの母音と、同じ粒子2つからなる2モーラの母音がペアを成しているのではなく、基本的な2モーラの母音と、短さを補うためにソノリティーを高められた1モーラの母音がペアを成していることが明らかになる。この意味でRPの体系は量の対立に基づいていると言える。また、RPの分析においては、低非円唇母音に中舌のものと後舌(寄り)のものを区別する必要が生じるので、低母音の粒子表現を変更する。

前節においてGAの母音を5種類の1モーラの基本的な母音の連続として分析したのと同様に、RPの母音は6種類の1モーラの基本的な母音の連続として分析できることを示す。また、この方言においては単独のA粒子が表層において削除されることも明らかにする。さらに、RPにおいてもGAと似たソノリティーに関する制約が働いていることをみたくうえで、この方言における母音体系の変化をソノリティーの階層の変化と関連づけて説明する。

3.3節では、前節で行った低母音の粒子表現の変更に伴い、GAの母音体系を再分析する。この再分析により、3.1節で残った4つの母音連続が説明され、さらに、すべての母音音素が異なった粒子組成を持つことが明らかになる。また、これにより、質に基づく体系とは、粒子組成から量が予測できる体系であるとする事ができる。最後に、rの音色を伴った母音を概観する。

第4章はまとめである。Schaneのアプローチではある音色の母音が粒子を用いてどのように表されるかは体系に依存していたが、前章で拡張したアプローチにおいては、母音は一意に表されることになる。これは、すべての母音がA, I, Uという、独立した3つのベクトルからなるという見方から導かれる自然な帰結である。

論文審査の結果の要旨

現代言語学における音声・音韻の研究に対して、理論面から重要な役割を果たしてきたのは、主として米国と英国の研究者であった。彼らが提出してきた理論的な枠組みのなかで、世界の諸言語を対象にした音声・音韻の研究は20世紀後半から飛躍的に発展し、多くの意義ある成果をもたらしてきた。しかしながら、不思議なことに、彼らの母語である英語を対象にした音声学・音韻論の分野では、まだ多くの未解決の問題が残っている。そのひとつとしてあげられるのは、母音体系である。

英語の母音体系に関するこれまでの代表的な研究としては、Jones, Kenyon and Knott, それにWellsの研究があるが、かれらが提出した母音表記は多くの点で不一致がみられる。たとえば、sheepに含まれている母音とshipに含まれている母音のあいだには、質・量・緊張度の点で違いがあるとされているが、そのうちのどれを本質的な違いと解釈するかによって、最終的な分析結果が異なってくるのである。また、研究者のなかには、英語の母音体系は構造的に組織化されていないという極端な見方をするものもある。

このような停滞気味な研究状況のなかで、論者はSchaneによって提唱された粒子音韻論(Particle Phonology)を自ら修正、発展させた枠組みのなかで、一般米語(General American, 以下GA)と英国容認発音(Received Pronunciation, 以下RP)にみられる母音に対して分析を試みる。その結果、GAとRPの母音に内在している独自の体系を明らかにしたうえで、GAの母音体系では質の対立が、RPの母音体系では量の対立が本質的なものであり、この違いによってGAとRPという方言差が生みだされていると主張する。本論文は、音声を正確に聞き分ける論者の卓越した能力と緻密な理論的分析とが結びついた成果であり、随所に注目すべき新しい知見が示されている。

まず、論者は先行研究の多くに共通する問題点を5つ指摘する。それらは、(1)音声的差異が軽視されている、(2)GAとRPが混同して分析されている、(3)対立する母音のペアの認定が恣意的である、(4)分析対象となるべき母音が見落とされている、(5)母音体系内のギャップの存在が説明されていない、という問題である。このうち(1)については、現在の音韻論で一般的に使用されている弁別素性理論において余剰規則で処理される余剰性も、母音の表示自体に含める方が望ましいという立場を明確にしている。また、(4)については、音素配列上の制約とPig Latinという言葉遊びにみられる現象から/ju:/と/jur/も長母音として認定すべきであるという主張を行っている。

続いて弁別素性ではなく、エレメント(element)を用いた分析を検討する。ここでいうエレメントとは1項的素性のこ

とで、通常、A（開口性）、I（口蓋性）、U（円唇性）の3つが母音を構成するものとして標準的に認められており、それぞれが単独で、または組み合わせあって、母音を形成するとされる。このエレメントを用いた母音表示は、融合などのプロセスを2項的素性よりも適切に表せることが知られている。エレメントによって母音を表示する枠組みを用いる理論のひとつに、Schaneの粒子音韻論がある。この理論で用いられる「粒子（particle）」は広い意味で先述したエレメントの一種であるが、口蓋性を表すI粒子と円唇性を表すU粒子の使用はひとつに限りながら、開口性を表すA粒子を複数用いて母音の開口度を表す点にその特徴がある。しかしながら、この立場では、英語のような母音の多い言語の場合本来区別されるべき母音が区別できないばかりでなく、不必要な母音まで過剰生成してしまうという問題が生じる。また、A粒子の使用に対してもより厳しい制限を与える必要がある。そこで論者はA、I、U各粒子の使用の上限を2つまでとし、それぞれの粒子の組み合わせによって母音体系を記述することを提案する。

この新しく提案した粒子表示でGAに見られる各母音を表すならば、rの音色を伴わない（non-rhotacized）2モーラの母音が、すべて5種類の1モーラの基本的な母音の連続（cluster）として表せるのではないかという予測が立てられる。この予測と実際のGAに見られる母音との間には、母音数・音価の点でいくつかのずれが見られるが、このずれは独自の根拠から動機づけられるいくつかの制約の作用によって説明される。つぎに、GAの2モーラの母音が5種類の1モーラの基本的な母音の連続として分析されるのと同様に、RPの2モーラの母音が6種類の1モーラの基本的な母音の連続として分析できることが示されている。また、RPにおける最近の母音体系の変化については、ソノリティーの階層の変化と関連づけて説明している。最後に、RPの母音体系はGAのものとは異なっているが、その理由はRPの体系がGAと違って量の対立に基づいているためであり、基本的な2モーラの母音と短さを補うためにソノリティーを高められた1モーラの母音がRPではペアを成していることに基因していると論者は結論づける。

このように、本論文は音声学・音韻論の分野の最先端に行く研究として高く評価される。特に感銘を受けるのは既存のコーパスや理論に対してつねに批判的な検討を加え、さまざまな角度から現象を掘り起こしながら、必要な場合には理論的修正を施そうとする柔軟な研究姿勢である。ただ、本論文で論者が枠組みとして用いている粒子音韻論は提唱されてから日が浅く、ここで扱われている英語の母音体系に対しては確かに妥当な説明がなされているが、子音体系や他の諸言語の音韻体系に対しても同じように有効であるかどうかは将来検証していかねばならない問題である。論者の今後の研究の発展に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成14年3月5日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。